

## ◎ 虎溪山のやきもの

多治見市文化財保護センター 学芸員 岩井 美和

虎溪山を含む多治見市共栄地区は、古くからやきものと深い関わりのある地域です。この地域は、多治見の中心を流れる土岐川によってつくられた河岸段丘の上面に広がっています。やきものに適した粘土が豊富に埋蔵されていたこともあって、古代からの窯跡が多数点在しており、現在も多くの窯元がやきもの生産をしています。また、多治見盆地を一望できる現在の虎溪公園周辺には、古代多治見の支配者層が眠る古墳があり、やきものが副葬品として出土しています。

そして多治見を代表する虎溪山永保寺は土岐川の織りなす幽谷にあり、鎌倉時代末期創建の臨済宗南禅寺派の古刹として知られています。平成 16 年、19～20 年の本堂・庫裏の発掘調査では、中世の茶陶や中国陶磁などの様々なやきものが出土しました。

また現在もこの地域には、やきもの作りに携わる方々がいらっしやいます。いずれも虎溪山という歴史的背景を土壌に、独自のやきもの作りに邁進されています。

本展覧会では、多治見市文化財保護センター所蔵品を中心に、古代から現代までの虎溪山にゆかりのあるやきものをご覧いただくとともに、この地域のやきもの歴史を紹介します。

### 1. 古代のやきもの

#### ・虎溪山一号古墳出土須恵器（6 世紀 岐阜県史跡）

記録によれば虎溪山一帯にはかつて 10 数基の古墳があったとされます。虎溪山一号古墳は 6 世紀に築造された横穴式石室の円墳です。

古墳の発掘調査では長さ 118cm の直刀・環頭柄頭の剣など 3 振、矛先と石突、金銅装の馬具、装身具の玉類、土師器の甕、須恵器の皮袋形瓶・提瓶・高杯・蓋杯など多数の副葬品が出土しました。副葬品の須恵器の編年などからみると、3 人の副葬者で、約 100 年使用されたと推定されます。また古墳の規模、副葬品とも当時の多治見盆地の支配者にふさわしいものです。このようなことから、この古墳は 6 世紀前半に築造され、3 代にわたる多治見の支配者の古墳であったと考えられます。



虎溪山一号古墳出土

須恵器皮袋形瓶・短頸壺

#### ・虎溪山古窯跡群 灰釉陶器

虎溪山には 10 世紀後半から 11 世紀前半にかけて稼働した灰釉陶器の窯跡が 5 つあります。灰釉陶器は、植物灰を原料とした釉薬が初めて施された平安時代のやきもので、当初仏具類や金属器の代用品として作られていました。平安時代になると中国宋時代の青磁や白磁が輸入されるようになり、その模倣品として貴族層で使用された高級なやきものでした。多治見市域では 9 世紀に生産が始まりその一大生産地となりました。灰釉陶器は、須恵器と比べると高火度で焼成することで焼き締まり、実用性に富んだ質の良いやきものです。この地域で作られた灰釉陶器は東山道を通じて東日本を中心に日本各地に流通しました。



虎溪山古窯跡群 灰釉陶器

## 2. 中世のやきもの

### ・山茶碗

山茶碗は灰釉陶器の流れを汲んだ無釉のやきもので、東海地方一円で生産されました。美濃では平安時代末期の12世紀から室町時代の15世紀頃まで生産されています。器種は碗や小皿が中心ですが、少数ながら壺や鉢なども焼かれました。唐物の輸入が増えたことによって需要が減った灰釉陶器に代わって、無釉にすることによって大量生産が可能となり、主に武士や庶民を対象にしたやきもの作りに移行していきました。

多治見市内には確認されているものだけで400近い窯跡があります。虎溪山・高田・小名田にも多くの窯跡があり、中でも小名田小滝9号窯からは「文永三年」(1266年)の銘がへらで描かれた山茶碗は、山茶碗の編年を知るうえで貴重な資料となっています。

### ・茶道具の生産

共栄地区では戦国時代に操業していた窯があり、茶道具や生活雑器の生産をしていました。小名田窯下古窯跡群は小名田町にあり、16世紀の大窯4基と江戸時代の連房式登り窯2基、大窯の作業場が発見されています。そのうち16世紀初頭に操業していた6号窯からは現存数が少ない白天目茶碗が発掘され、発掘調査がされた美濃大窯の中では最古のものと考えられています。これらの窯は戦国時代から江戸時代中期までの窯業史解明において、重要な役割を果たす窯跡群であるといえます。

また、同じ小名田町にある尼ヶ根古窯跡群は16世紀後半を主体に操業した窯です。3基の大窯とかわらけを焼いた窯が1基確認されました。なかでも1号窯からは初期の瀬戸黒茶碗が出土しており、美濃桃山陶が発展する先駆けの窯であると考えられます。



尼ヶ根古窯出土 茶道具

## 3. 近世のやきもの

### ・江戸時代の貧乏徳利

江戸時代後期、虎溪山の北側にある共栄地区では主に江戸・大坂などの大都市に向けた雑器の生産が盛んでした。高田地区では「白粉土」といわれる良質の陶土が産出され、この陶土を使って「貧乏徳利」を多く生産しました。江戸で需要が多かったのは三合ほどの容量の小型の徳利で、飲酒の習慣が広まった下級武士や町民などが、その日飲むだけの量の酒を買うための「通い徳利」として使用しました。嘉永3年(1850)の記録によると高田・小名田あわせて年間10万俵の徳利が生産され、江戸・大坂へ出荷されました。

高田大ザヤ窯(現・高田町3)は、江戸時代後期から昭和初期に稼働していた連房式登り窯です。江戸時代後期の灰釉徳利や明治時代の鉄文字の徳利を中心に生活雑器が多く出土しています。

### ・江戸時代後期のやきもの

高田大ザヤ窯では徳利以外にも灯明皿、小杯、茶碗など生活雑器を生産していました。またこの他に特徴的なのが染付を施した炆器製品が多く見つかった点です。美濃では19世紀以降に磁器生産が始まりますが、同時期に染付を施した炆器製品も多く生産されています。炆器製品は磁器生産の試行錯誤の中から生まれたといわれ、陶器より吸水性がなく光を透さない性質のやきものです。

徳利生産が中心の共栄地区ですが、高田大ザヤ窯でも炆器染付製品を生産していました。これらの炆器染付製品は同時代の磁器製品と比較すると安価で、商品経済の広がりを見せていた都市周辺の農村部で使われるようになったといえます。

#### 4. 永保寺の出土遺物から

##### ・永保寺本堂・庫裏発掘調査による出土遺物

虎溪山永保寺は鎌倉時代末期創建の臨済宗南禅寺派の古刹です。正和 2 年(1313)、夢窓国師が仏徳禅師ほか 7、8 人と共に甲斐から旅を続けていた途中、美濃の長瀬山に立ち寄りました。その際、「四隣数里人無き幽境」といわれたこの地の閑静で美しい風景に魅せられ、隠棲の地として庵を結んだのが永保寺のはじまりです。夢窓国師(夢窓疎石)を開祖、仏徳禅師(元翁本元)を開山とし、以来約 700 年、30余の塔頭や僧坊が境内に建ち並び隆盛を極めた室町時代、再三の兵火によりその大部分を消失した戦国時代、明治の神仏分離令と神道国教化政策による衰微など幾変遷を重ねながら、天下の名刹として今に至っています。国宝の観音堂・開山堂及び名勝の庭園は、今なお当時の姿を保ち続け、また、数多くの名宝が秘蔵されています。



永保寺本堂・庫裏遺跡出土品

平成 15 年 9 月 10 日、永保寺庫裏から出火があり、木造檜皮葺き本堂(方丈)、木造瓦葺き庫裏、木造瓦葺き大玄関、木造瓦葺き典座等の建物が全焼する甚大な火災が発生しました。この火災による国宝建造物である観音堂、開山堂には被害はありませんでしたが、本堂に安置されていた本尊・釈迦如来坐像及び脇侍文殊普賢菩薩が(市指定文化財)が消失するにいたりました。その後寺ではただちに再建対策委員会が組織され、再建事業を翌年より行いました。この再建に伴い、埋蔵文化財発掘調査が行なわれ、永保寺本堂・庫裏の地中より永保寺創建以前から近代までの様々な遺物が見つかりました。

永保寺庫裏跡から発掘された山茶碗に、「正中 2 年」という刻銘のある鉢があり注目されています。正中 2 年(1325)は永保寺が開山されて 12 年たった時期で、夢窓疎石が後醍醐天皇の招きにより上洛し南禅寺に入った年です。また、三彩洗や鉄釉天目茶碗などの中国陶磁も発掘されました。

#### 5. 近代のやきもの

明治時代の高田・小名田地域では筆書きで酒屋名などを入れたいわゆる「高田徳利」の生産が盛んになります。主に高田では窯屋が多く、小名田の商人が販売するという形であったといえます。昭和初期に



湯たんぽ、汽車土瓶など

なるとガラス瓶の普及から、高田徳利は打撃を受けたとされます。高田工業組合では徳利以外の製品開発を検討し、大正時代から始めていた網足、汽車土瓶、蒲鉾型湯たんぽなどの生産量を増加するようになりました。また、昭和 40 年代以降には地酒や焼酎ブーム、民芸品ブームで需要が急増し、再び鋳込みによる徳利生産が増えていきました。

## ・虎溪焼

明治時代後半、中央線の敷設にともなって西浦焼を創始した西浦圓治はトンネルの煉瓦を製造しました。このとき煉瓦用の土で茶碗や花瓶、徳利などの焼成も試み、これが虎溪焼のはじまりとされます。その後、西浦焼の工場長を務めた西浦辰太郎が明治 38 年(1905)に独立し、虎溪山下に窯を築いて虎溪焼を製造しました。

虎溪焼には磁器と陶器の両方があり、磁器製品は西浦焼同様、釉下彩の吹き絵技法で鷲や富士を描いたもの、陶器製品は無釉のものも多く、釉薬で盛り上げるようにして加飾したものもみられます。このように西浦焼の系譜を引き、さらに煉瓦生産との関わりを持った素朴な風合いの虎溪焼でしたが、資本や販路が思うようにならず、明治 42 年(1909)にやむなく製造を中止しました。



虎溪焼の土瓶、徳利

## 6. 無形文化財

### ・荒川豊蔵

国重要無形文化財 志野・瀬戸黒 技術保持者 故・荒川豊蔵(1894～1985)

昭和 30 年 2 月 15 日指定

荒川豊蔵氏は昭和 5 年(1930)、可児市大萱の山中に桃山時代の窯跡を発見し、それまで瀬戸で焼いていたと考えられていた志野・瀬戸黒などが美濃で焼かれていたことを実証しました。以来、衰退していた志野・瀬戸黒の再現と復興を目指すとともに、芸術性豊かな自己の作風を確立し、志野・瀬戸黒の技術保持者として国の重要無形文化財となりました。また、これらの功績により昭和 46 年(1971)11 月には文化勲章を受章しました。現代の美濃陶芸の隆盛はひとえに志野の偉大な功績が礎となったものです。



荒川豊蔵作 志野花入

### ・成瀬教三

多治見市無形文化財 高田徳利成形技術 技術保持者 故・成瀬教三(1901～1992)

昭和 56 年 4 月 10 日指定

成瀬教三氏は明治 34 年(1901)に高田の窯元に生まれ、20 歳のころから本格的に徳利作りに従事しました。焼成時の土の収縮を考え、徳利の容量の正確な成形を長年の経験や勘により身につけ、高田徳利の技術を継保持持してきた名工でした。最盛期には二升徳利を一日に約 200 本も成形しました。



成瀬教三作 飴釉徳利

## ・水月窯

国の重要無形文化財であった故・荒川豊蔵氏は、桃山陶の再現を試みた大萱牟田洞の窯とは別に、美濃の伝統を生かした一般家庭向けの心和む製品を提供したいという思いから、昭和 21 年(1946)に水月窯を築きました。その意思は子息たちによって受け継がれ、今日まで土作りから成形、焼成、上絵付焼成にいたるまでの工程を全て手作りで行う製造方法を守り続けています。また、モロ(作業場)、エンゴロ(匣鉢)小屋、薪置き場、登り窯、穴窯、錦窯(上絵付用の窯)から構成される窯場の形態も、美濃の伝統的な構造を維持しています。水月窯は豊蔵氏の開窯という歴史的背景とともに、美濃の伝統的窯業生産技術を現代に伝える窯として重要な存在であるとして、平成 22 年(2010)に美濃窯伝統的窯業生産技術保持者として多治見市無形文化財に指定されています。

## ・青山禮三

多治見市無形文化財 染付 技術保持者 故・青山禮三(1919～2017)

青山禮三氏は、染付の技術・技法に優れ、その特徴をよく理解した巧みな筆致で伝統を継承しています。特に美濃の江戸時代末期の染付の良さを見だし、素地に木節粘土を用い、絵具に山呉須を用いる等、現代にその良さを再現したことが高く評価されています。

## ・青山双溪

多治見市無形文化財 白天目 技術保持者 青山双溪(1948～)

天目茶碗は黒や茶褐色の鉄釉をかけたものが多く、日本では 13 世紀末に瀬戸窯で天目の生産が始まり、15 世紀中頃には美濃窯でも焼かれるようになりました。その中に数は少ないものの灰釉や長石釉をかけた「白天目」をみることができます。

白天目は生産期間が短かったためか現存数が少なく、茶道黎明期の本格的な和物茶碗を考える上で不可欠の存在で、美濃窯の前代の技法と桃山陶とを繋ぐ貴重な技術です。

青山氏は白色を呈する陶土の選択、透明性の高い灰釉の配合、紐輪積みロクロ水挽きによる素地の成形を行い、戦国期に瀬戸・美濃窯で焼かれた白天目の技法を再現しました。



青山双溪作 白天目

※写真の資料はすべて多治見市教育委員会所蔵

### 【展覧会情報】

企画展： 「虎溪山のやきもの」  
会期： 5月26日(火)～8月30日(日)  
会場： どうしん美濃陶芸美術館  
多治見市虎溪山町 4-13  
どうしん学びの丘“エール”内  
TEL:0572-22-1155  
開館時間： 10:00～17:00  
休館日： 月曜日  
入場料： 無料

